〈一 冊 の 本〉

徳永哲也　著

『はじめて学ぶ　生命・環境倫理』

――「生命圏の倫理学」を求めて ――

ナカニシヤ出版　2003年　￥2,500

わたしたちひとりひとりの命とそれを取り巻く環境は、とても大切なものです。そんなことは分かり切ったことだ、と思われるかもしれません。しかし、「では、なぜ大切なの？」とあらためて問われると、きちんとした答を述べることは難しいのではないでしょうか。それに、人によってその理由が違っている場合もあります。

この本は、生命をめぐる医療や環境を、その根っこから考えていくための道しるべとなります。たとえば、人間であるということはどのようなことなのか、まだ人間ではないとか、もう人間ではないということがありうるのか（パーソン論）。患者と医療スタッフはどのように関わり合えば、互いに尊重しあえるのか（ＱＯＬ、パターナリズムとインフォームドコンセント）。幸せな死とはどのようなものか、また、自分の死を自分で決めていいのか（末期医療、尊厳死）。遺伝子診療やクローン技術、ＥＳ細胞などによる再生医療は人間の尊厳という立場からはどこまで可能なのか。本書の前半では、そうした問題を倫理学的に考えていきます。

また、暖冬が予測されていたのに、この冬は記録的な大雪が降りました。昨年は台風やハリケーンも猛威をふるい、ここ何年かの異常気象が気になります。カナダのモントリオールで行われた11回目の地球温暖化防止会議では、決定的な対策は出ませんでした。「森林よりも多くの二酸化炭素を吸収している海も、80年後には飽和して、暖められたサイダーのように二酸化炭素を吐きだし、人類は窒息死してしまう」という有能な科学者グループの報告もあり、環境問題にもっと真剣に、身近なところからでも取り組まなければいけないなぁ、とも思います。でも、なぜ環境は守られるべきなのでしょうか。自然にも存在していく権利があるからなのか、それとも結局は人間のために環境保護をすべきなのでしょうか。その環境問題に関しても、理論的な視点を与えてくれるのが本書です。

生命倫理学は、人命や、人格による自由な自己決定は何よりも大切だ、という視点からのアプローチでなされます。ところが、環境倫理学の方は、人間も他の自然の構成員もみんな平等であり、個人の人命よりも生態系の保存の方が大切だ、環境のためには民主主義や自由主義も制限されなければならないのではないか、という「生態系中心主義」が主流になりつつあります。どちらの主張ももっともなように思えます。

本書は、このように、逆の方向を向いているかに見える二つの倫理学の抱える問題を指摘し、その統合をも視野に入れて書かれています。

（本研究所研究員　長友敬一　倫理学）